

「CAD設計」

(2004)

僕の周辺で建築の「CAD化」が本格的に浸透し始めたのは2000年頃からだろうか？ この頃、肩書きと口先と赤鉛筆だけで仕事をするアナログおじさんに安住していたお蔭で、世のデジタル化からすっかり取り残されていた僕だったが、偶然のラッキーなきっかけでJW・CADとの付き合いが始まり、この建築のデジタル能力の凄さにすっかり魅せられた。偶々時代は、老人福祉施設バブルの頃で、次々にこれらの基本設計をCADでこなした。同じような建物の数を処理するのにまさにCAD設計はうってつけ過ぎる程だった。僕の場合は偶々基本設計というジャンルでの仕事での実感だが、これはほんの一例で、今CAD設計に携わっている多くの設計者の皆さんは、僕が感じている以上の凄さを実感しているはずだ。

今までの設計事情と比較すると、天と地程もある設計の省力化と情報キャパシティの大きさには驚く他無い。建築だけでなく今や世の中の動きの全てがこのIT化・デジタル化により様変わりし始めている。

一方皮肉な事に、建築のIT化により物凄い高能率化・省力化が可能となったのに、世は公共事業の削減とやらで仕事量は激減しているのが実情である。

会社での40年間の建築人生の内、入社以来50歳になるまでの30年間、よくぞ製図台でトレーシングペーパーに多くの図面を書いたもの

だと感慨深い。見方を変えれば、僕の中でのC A D化の時期が10年違っていたら、又30年違っていたら・・・と色々な場面を想像するだけでも面白い。特に感じるのは、僕達の学生時代にパソコン、C A Dがあったら・・・と禁断にも近い想像に時々うなされることがある。良く考えてみれば、大学時代の僕たちの設計の大半の部分は「どうやって自分のアイデアを表現するか」・・・に掛かっていたような気がする。曰く、墨入れの技術の為になけなしの小遣いでドイツ製のロットリングを買い、文字の美しさの為にレタリングの習得の特訓をし・商業デザインにも手を染め、或いはインスタントレタリングを多用し、空間らしさの表現にスクリーントーンを貼り、色彩による奥深さの表現の為カラートーンを貼り・・・等など。これらの表現技術に大半の労力・金・時間を取られ、肝心の建築空間の創造・構築のゆとりが無かったような気がする。

こうして出来上がった僕の「卒業設計」も、多用したインスタントレタリング、スクリーントーン、カラートーン等はすっかり綺麗に剥がれてしまい今や見る影も無くなった。それにしてもあの曲線を多用した僕の卒業設計の何面かのパースは今ならC A Dを利用すれば難なく描けるが、あの当時一体どうやって描いたのだろうか和我ながら今でも不思議だ。

C A D設計については、パソコンアレルギーの人の中には、設計デザインをパソコンなんぞに任せるなんてとんでもない・・・設計のアイデ

ア・企画・デッサンだけはやはり、5Bの鉛筆かコンテで・・・と言う人が必ず居るに違いないが、僕はそうは思わない。アイデアはアイデアでパソコンに取り掛かる前にその骨格はある程度出来上がっているものだし、設計を固めてゆく過程でアイデアは増幅してゆくものだから心配は無用だと言いたい、このアイデアを具体的に構築してゆく過程でこそCADが物凄い威力を発揮してくれているのだ。その証拠にこの数十年単位での日本と世界の建築デザインの変遷を見ると、デザインが驚くほど自由で・柔らかく・有機的になった・・・というのがザックリの印象である、パソコンという機械的な面影が寧ろ昔の建築よりは感じられなくなってきた、・・・デザインを「詰めた」証拠だ。

最近地元の大学の建築デザイン専攻の学生さんの勉強の様子を見聞きたり、各地を巡回している「全国大学卒業設計展」を見たりするにつけ、建築デザインの進化・変貌振りには驚嘆させられる。今や建築学生達の全ての図面はCADによるものだ。建築のIT化は産業人のみならず、建築専攻の学生さんにも怒涛のように迫っている、寧ろそれどころか「若さ」故に驚くほど自由に且つ高度にCADを使いこなしていて、もはや僕達の出番は無い。

今や地元の工務店辺りでも事務所の設計室の中に縦型の設計台が置いてあるのを見る事が無くなった。先日隣町にある僕の実家の倉庫を解体した時、僕が昔使っていた縦型の巨大な製図台とドラフターが埃にまみ

れて出てきた。

このお蔭で、定年後どさくさに紛れて、考えても見なかった設計事務所を開設する事が出来た、CAD設計の賜物だった。